

講演会とミニコンサート日程

4月24日(金)	18:30~20:30	土岐市文化会館
4月25日(土)	13:30~15:30	名古屋市 港文化小劇場
一人でも多くの方に 耳を傾けて欲しい!! だから・・・入場無料です。		
4月26日(日)	14:00~16:00	一宮スポーツ 文化会館
4月29日(祝)	13:30~15:30	浜松勤労会館



日本の人々に伝えたい。私達の祈りを！私達の願いを！

もしも今、あのチェルノブイリのような事故が、日本で起きてしまったならば…
 炎の中に飛び込んで行くのは誰だろうか？ プールの水を抜くのは誰だろうか？
 死の灰を拾い集めるのは誰だろうか？ そして、石棺を閉じるのは誰なんだろうか？
 しかし、チェルノブイリの森の中では、今日もその決断を迫る火災が起きている…。

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10
 チェルノブイリ救援・中部 代表：神野英樹
 郵便振替：00880-7-108610
 ☎/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:30~15:30)

チェルノブイリのもう一つの衝撃 (抜粋)・前編

—放射能は人間の心臓や血液だけでなく、脳細胞をも冒す—

ИЗВЕСТИЯ

УКРАИНА

1997. 10. 3付

『イズヴェスチヤ・キエフ』発

ソコロフスカヤ・ヤニナ

(山崎タチアナ訳)



ウクライナには「チェルノブイリ白痴」という診断名がある。

国は、国民の知能低下という未解決の問題と直面した。原発作業員やリクイデーターだけではなく、立入禁止区域へ立ち入ったことの無い人の中にも増加しつつある。この疾患は、大人にも、また事故から数年経って生まれた子どもにも発症し、ウクライナにとって悲惨なものになった。特徴は、元来病弱だった人だけでなく、とても健康な人も冒されたと言うことだ。理由は不明であるが、事故後11年経った今、精神病院ではチェルノブイリ関連の患者が増加している。かつて極秘扱いだった放射能被爆による脳細胞破壊の問題は、今、表面化した。医師達は少しためらったが、私は彼らの話を聞くことができた。

1. 六号室での面会

ウクライナには80の精神病院があり、たった一ヶ所チェルノブイリ関連の患者を扱っている「キエフ第三病院」が、キエフ市内から遠く離れたグレヴァハという小さな町にある。

院長ジュリノク・ガリーナの言葉。「こちらは病院の畑です。去年は病院への予算がほとんどなくて、患者に与える食物をここの作物で補いました」

中庭の奥に病棟があった。長期入院患者のブジーナ・エミーリさん(匿名)。かなり老けてみえるがまだ60歳である。彼は常に痛みで悩まされ、歩くことも苦痛だ。そして、文字を忘れ、昨日のことも思い出せない。これは、彼が1986年にチェルノブイリでたった二日間過ごした結果だ。当時トラックの運転手だった彼は、『原子炉の消火作業のためのソーダ』を運んだことだけは覚えている。医師達は、優秀な運転手だった彼についてこう語った。「放射能に冒された彼の脳細胞は急速に萎縮し老化している。あと一年後には完全に白痴になる」

六号室は脳細胞傷害が軽く、会話に支障が少ない、比較的症状の軽いチェルノブイリの女性達がいた。最年長はミハイロヴァ・ガリーナさん(45歳)。チェルノブイリで倉庫管理人として働いていた。1986年には数回ゾーンを訪れた。一年前彼女は「うつ病、放射能恐怖症、貧血」を主訴に自分からこの病院を訪れた。症状が改善せず、二回目の入院をしている。

六号室の隣には、ウクライナ科学アカデミーのオゴイエフ・ピョートルさんと、オペラ歌手のイエフチェフ・ウラジーミルさんという二人の知識人がいた。当時リクイデーターのために現地でコンサートを開くと18ルーブルも高いギャラが貰えたので、ウラジーミル氏は三回も慰問に訪れている。「当時はよく稼いだが、今は障害者一級になりました」と彼はいう。

病棟医長は悲しげにこう語る、「ほとんどの患者は、いずれ完全に白痴になる宿命です」(続く)

ウクライナ⇄日本 <情報ホットライン>

1/29 日⇄ウ
・「消防士の日(1/29)」おめでとう！
・今日私達は、医療機器や粉ミルクを名古屋港に運び込み、税関手続きを終えました。船は、順調にいけば、3/9 にそちらに到着するでしょう。

2/20 ウ⇄日
・フェニルアラニン・レス・ミルクは、「国立診断センター」に届けます。

2/27 日⇄ウ
・粉ミルクは「国立小児病院」「市立小児病院」「子どもの家」に届けます。
・ナロジチ病院の救急車の代金を支払いました。来週にはキエフから届くでしょう。
・国際送金のため、4種類の契約書を送ります。送金総額は 2,055,000円です。これらのお金が、子ども達のために必要な粉ミルクを買うのに役立つ事を願っています。
・名古屋市の消防局が、たくさんの耐火服・靴・ヘルメットを集めてくれました。中古品ですが十分使える物です。二人が4月に来日した時、確認できますよ。

3/9 ウ⇄日
・事故処理作業者協会の総会があり、昨年度の協会の活動が承認されました。会員は、現在 171名になりました。総会の中で、「救援・中部」の継続的な支援に対し、感謝の意が表明されました。チュマク氏が、代表に再選されました。

・「子どもの家」には、現在、生後1ヶ月から3才までの92名の子どもがいて、その4分の1は、汚染地域から来ています。

3/10 ウ⇄日
・移住基金委員会で、長時間にわたり、どのような援助が効果的かを討論しました。
・消防署は、たくさんの友人ができたことを喜んでます。日本に着いたら、名古屋市の消防士に感謝状を渡します。ドイツで耐火服を買いました。

・事務所の模様替えをして、5月にあなた方が来るための準備をしています。

3/16 日⇄ウ
・救急車の確認のため、ナロジチまで行ってくださりありがとうございます。竹内さんも、同行したのですね。

3/17 日⇄ウ
・アントニウクさんとトビャンスキーさんの日程についてお知らせします。(略)
・次年度の新しい代表は、中島しぐれさんに決定しました。

3/17 ウ⇄日
・救急車をナロジチ病院に届け、竹内さんが写真を撮りました。
・イリチェフスク港に荷物が着きました。ジトーミルに届いたらすぐに知らせます。
・中島さんが次期代表と聞いて嬉しいです。彼女は、代表の期間中真の友人であった神野さん同様、私達の活動をよく知っています。

3/26 ウ⇄日
・嬉しいお知らせです！ 救援物資の貨物が無事ジトーミルに到着しました。



<ジトーミル市内のバザール風景>

(J) (以下 次号)

ナロジチ病院に救急車が贈られました!!

皆さんは、救急車がわりの荷馬車で病院に運ばれてきた、おばあさんの写真（「ポレーシェ」38号）を覚えていますか？

急患の連絡があっても、動く救急車がなくて、市のバスに回り道をお願いして連れてきてもらったとか、サナトリウムへ療養に行く子ども達のバスに同行した救急車が、馬力不足で、ついて行けなくなり、途中で置き去りにされてしまったとか、冗談のような本当の話をよく耳にしました。

そのナロジチ病院に、とうとう私達の贈った救急車が届いたのです。

キリチャンスキーさんの努力もあって、予算より少し安く買えたため、故障中の救急車も修理できるとか。また、医薬品棚・保冷庫一杯の医薬品も、同時に贈られました。（J）



＜コロミチュク院長に車のキーを手渡すキリチャンスキーさん（右）と、贈られた救急車＞



＜医薬品の数々＞

新生児用蘇生装置・車イス・粉ミルクをのせたコンテナが、無事ジトーミルに!!

まだ冷たい風が吹き抜ける1月29日、名港海運の倉庫で、医療機器（州立小児病院のための新生児用蘇生装置）や、車イス、フェニールケトン尿症用の特殊粉ミルク等の搬入・税関手続き作業が行われました。

2月3日の出航から、2カ月近い長旅を終えたコンテナは、3月26日、無事ジトーミルに到着しました。まもなく、それぞれの最終目的地に届けられ、笑顔で迎えられる事でしょう。

車イスの寄付をしてくださった日進医療器の皆さん、星美学園小学校の皆さん、車イスの一時保管を快く引き受けてくださった音羽町の鈴木夫妻、ミルクキャンペーンに組織をあげて取り組んでくださった自治労の皆さん、たくさんのタオルを集めてくださった皆さん、そして「ポレーシェ」の読者の皆さん、どうもありがとうございました。（J）

物資を送り続ける

チェルノブイリ 救援NGO 原発事故から12年

チェルノブイリ原発事故が十九日、現地ミルクの被災者への救援活動を続や車イス、医療機器を送るため、港区の海運会社で通関手続きを行った。

このNGOは、チェルノブイリ救援・中部（柳野英樹代表）で八年前から作



被災者たちへ送られる救援物資

二回ほど、ウクライナのジトーミル市立小児病院やジトーミル市立小児病院などに救援物資を届けたり、送ったりしている。今回は、現地からの要望で、ミルク百缶や車イス十七台、新生児の生後服一箱、また約百八十万円を送った。

物資には、静岡県清水市の星美学園小学校の児童が一週間に一度給食のおかずを届減らしたり、空缶街を集めたりして購入した車イスなどが含まれている。柳野代表は、今年四月で事故から十二周年。人の意識が風化しつつあるが、現地で事故処理の作業や新生児の二、三次災害が拡大しつつある。今後、被災者が自立できるような援助を続けたいと訴えている。

《ゼレムリヤ村のアンケート第二弾 調査結果》

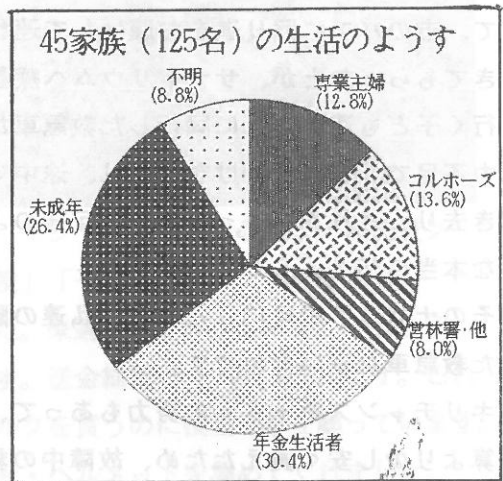
神野美知江

これは、1997年5月に移住者を対象に行ったアンケート結果をまとめたあと、比較対照のために移住基金とゼレムリヤ村診療所のスタッフの協力を得て、同年10月に実施したものです。

アンケートに答えたのは、原発事故以前からゼレムリヤ村に住んでいる、45家族（125名）です。この中から、「生活について」と「健康状態について」を紹介します。

1. 住民の生活について（年齢3区分別人口）

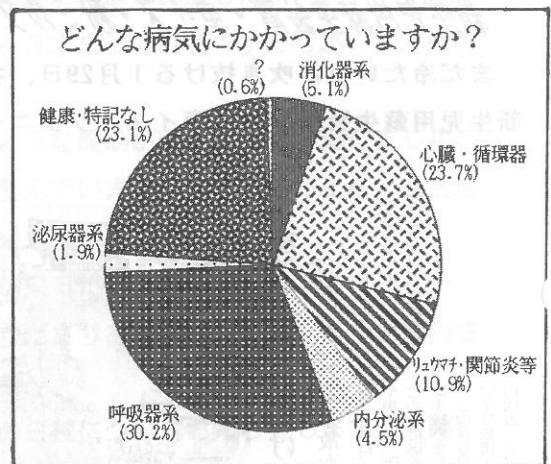
- ① 老年人口層（65才以上） 22名
 全て年金生活者
- ② 生産年齢人口層（15～65才）70名
 - コルホーズ勤務 17名
 - 営林署勤務 6名
 - 協同組合勤務 2名
 - 雑役夫 1名
 - 年金生活者 16名
 - 障害者 1名
 - 専業主婦 16名
 - 不明 11名
- ③ 年少人口層（0～14才） 33名



- ・ 住民の半数は、何らかの収入があると書かれていました。長期間勤務によって、給料は平均50万円（中には120万円の人もいた）。
- ・ 医薬品や治療費は、「払うことができる」と記入していますが、ほとんどの住民は高価な医薬品を必要とする疾患に罹病していないようです。

2. 住民の健康状態について

- ・ 罹病についての回答は、数多くの疾患名が記入され、のべ156項目にもなりましたが、特に、老年層者に疾患名の種類が多く書かれていました。
- ・ 老年人口22名、年少人口33名を考えると呼吸器疾患・心臓疾患・リュウマチ性関節炎が多いようです。また、呼吸器疾患のほとんどは、「感冒性疾患」でした。
- ・ 何よりも「健康」と答えた人がいたり、「記入すべき疾患が無い」というのは、汚染されていない土地で生活してきた証と言えます。



3. まとめ

罹病についての質問に、「健康」と答えられるのは、被曝した人とそうでない人との違いではないでしょうか。あらためて、放射能の影響を考えさせられました。

これからもみなさんの協力を得て、村人の健康管理を担う「ゼレムリヤ診療所」を通して移住者の人々を支援していきたいと考えています。



=大垣ムラサキツユ草の会は今=

代表 大谷早苗(写真左)



ムラサキツユ草の会が「チェルノブイリ救援」にかかわる事になったのは、同じ子どもを持つ母親として、何かをしなくてはならなかったからです。ウクライナの子ども達に、放射能で汚染されたミルクではなく、きれいなミルクを送ること、心に深い傷を負った子ども達に、少しでも夢を持ってもらえるように絵本を届けたいと、当時特に若いお母さんは我が子連れ歩きながら頑張ったものでした。思い出すと、随分昔のように思われます。

今、私たちムラサキツユ草の会は、風前のともしびになりました。もともと少人数だった上に、子育てが一段落すると、それぞれ母親業だけでなくもっと社会に出ることを考え始めたのです。老人介護にかかわって将来のために備える人、子どもの学費に備えてパートに出る人とそれぞれの道を歩み始めました。なかなかみんなが集まることができなくなり、少し寂しい気もしますが、またいつか同じ思いで集まる事もあるでしょう。

そんな状況の中で、みんな揃って今も続けている事が一つあります。休耕田を利用して大豆の種を蒔きます。除草剤を使わないので暑い夏の草取りはとても辛く、時には大豆の生育よりも草の生育の方が良いときもありました。収穫した大豆で冬には味噌を仕込み、一年後には塩分を抑えた手前味噌ができあがります。今、遺伝子組み替え大豆が国内にも入ってきています。表示がされていないので、私たちは知らないうちに食べたくない物まで食べていますが、せめて自分たちで出来ること「食の安全」と、大きくは食糧自給になればと夢を膨らませています。

<1998年度の救援・中部の代表が決まりました!!>

ポレーシェ読者の皆さんへ

1990年の「ミルクキャンペーン」に参加して以来、7年が過ぎました。年月の経過とともに、被災地の深刻な被害は増加し、送られてくる情報に胸を痛めています。3月の運営委員会で、「98年度の救援・中部代表」という大役を、引き受けさせていただく事になりました。これからも、救援中部の活動に変わらぬご支援をいただけるようお願い申し上げます。



(中島しぐれ 新代表)

皆さんのご協力に心から感謝しています。

忙しかったけれども、とても充実していた2年間でした。ポレーシェ誌上でも、機会があるごとに紹介して来ましたが、【チェルノブイリ】は、人間が作り出した最も悲惨な出来事のひとつとして、何十年・何百年と語り継がれ、決して忘れ去られる事はないでしょう。だから、私を含めた「救援・中部」と、「ウクライナの人々」との交流は、よい意味で、生涯続くような予感がするのです。(J)



(神野英樹 前代表)

ユーリさんに会えた！！

(渡辺 学)

去る、3月7日(土)に、セルゲイ君の父親であるユーリさんとお会いする機会を得ました。

彼の息子「セルゲイ君」の事は、救援・岐阜より『ポレーシェ』で紹介され、ご存じの方も多いと思います。私も、救援・岐阜の活動に参加し、僅かながらセルゲイ君の治療費を支援させて頂いた経緯がありました。

先日、ユーリさんにお会いしたときに、キエフのセルゲイ君に出したクリスマスカードの返事が届いた事をお話ししたところ、すぐに思い出されて、ロシア語の文章が、相手に伝わっていたという事に感激しました。

ユーリさんの話によると、セルゲイ君は現在、短期大学で経済学を勉強中で、体の方もすこぶる良好だという事です。

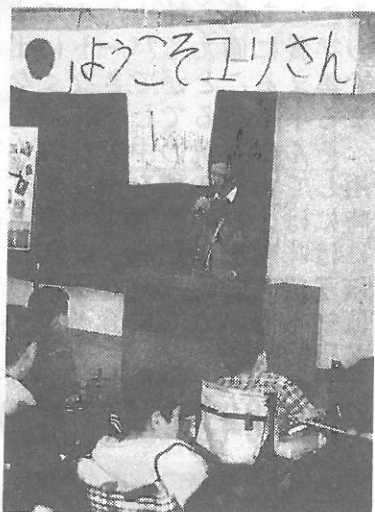
何の取り柄も、技術もない私ですが、セルゲイ君だけでなくウクライナやベラルーシの被災者の人達に、今後もこのような精神的な面で支援を続けていきたいと思っています。

ユーリさん、お酒の弱い私ですが、今度はキエフで一緒に飲(や)りましょう。



<左から3人目が渡辺さん・中央がユーリさん>

「支援活動アリガトウ」
「チエルノブイリ原発被災少年」
セルゲイ君の父親来岐



セルゲイ君の様子などを話すユーリさん
岐阜市の県立長良養護学校で

ようこそ ユーリさん！

96年から1年間「セルゲイ君キャンペーン」にご協力いただきありがとうございます。そのセルゲイ君の父親のユーリさんが、日本語研修のため3カ月日本に滞在されました。この機会に、ユーリさんから「その後のセルゲイ君のようす」などを伺おうと岐阜と名古屋で交流会を持ちました。岐阜ではユーリさんは、メンバーとの交流に先立ち、バザーを開いてセルゲイ君にカンパを寄せて下さった県立長良養護学校を訪問、子どもさんたちに直接お礼を述べました。学校では全校集会を開いてユーリさんを歓迎。

ユーリさんは、自らも障害を持ち、命と向き合う厳しい毎日を過ごしていることもさんたちが、ほかの子へ優しい気持ちに向けてくれたことにとっても感動したようすでした。

その後食事をしながら、セルゲイ君はいま比較的元気で短大に通っている、成績がとてよよい(嬉しそうに)、たくさんの方々の支援のお陰でセルゲイの今がある、心から感謝しているなどと、10人ほどの出席者と和気藹々のうちに話し合いを深めました。岐阜はちょうど梅が満開でしたので名所の梅林公園を散策し楽しい一時を過ごしました。

スケジュールの都合で、ごく一部の方にしかご連絡出来なかったことをお詫びします。

チエルノブイリ救援・岐阜 新田幸子

竹内さんの ウクライナ便り

(チェルノブイリ救援・中部キエフ駐在員 竹内高明)

<1998. 3. 2>

◎チェルノブイリ原発3号機で、原子炉冷却システムの溶接箇所の欠陥除去作業が再開された。

この欠陥(複数)のため昨年9月から同機は予定外の運転停止・修理に入っている。発見された260の損傷箇所のうち164が修復された。いくつかの新しい、大きな亀裂も見つかっている。再度の超音波調査でさらに欠陥が発見されれば、3月末まで3号機の運転再開は不可能となろう。(『イズヴェスチヤ・ウクライナ版』1/7号)

◎国家雇用センター(職業安定所のようなもの?)の見通しでは、98年末にウクライナの失業者数は240万人に達するという。(『День』1/27号)

◎内閣は経済特区「スラブチチ」創設に関する法案を承認。この経済特区はキエフ州スラブチチ市に2010年まで設けられるもので、チェルノブイリ原発の閉鎖にともない生ずる失業者に職場を確保するため投資を誘致するのが目的という。(『イズヴェスチヤ・ウクライナ版』2/21号)

◎ウクライナ人の平均寿命(97年度):女性72.6歳(6年前に比べて2.2歳減少)

男性61.6歳(同4.4歳減少) (『День』2/19号)

2月に新学期が始まり、現在私は火曜から金曜まで毎日授業をしています。こちらとしては非常に暖かい気温が続いており、3月1日現在、日中10℃くらいの気温です。3月29日には最高会議の総選挙が予定されており、世論調査では共産党、民族前進党、社会民主党、汚職スキャンダルで退陣した前首相の率いる共同体党が有力ということです。緑の党も人気順位ベスト10に入っていますが、政策がはっきりしないと言われています。選挙区制と比例代表制をあわせた新しい選挙制度による最初の選挙です。

<1998. 3. 11>

3月2日、ジトーミルよりドンチェヴァ氏・タヴァンスキー氏がヴィザの手続きのためキエフを訪れ「キエフでナロジチ病院用の救急車が購入できたら、それに私を乗せてナロジチへ連れていく考えだ」と言っていました。ナロジチ病院にはドイツ赤十字から救援物資が届いた所とのことでした。ずっと暖かい日が続いていましたが、今日は久しぶりに気温が零下に下がり積雪がありました。

<1998. 3. 18>

16日朝キエフ発のバスに乗り、雪道で遅れましたが10時40分頃ジトーミルに着き、キリチャンスキー氏の出迎えを受け、車でナロジチへ行きました。日帰りするつもりでしたが、結局一人でナロジチ病院長コロミチュク氏宅に一泊しました。翌朝、慌ただしくナロジチ発のバスでキエフへ戻り、すぐに大学へ行き授業を一コマやりました。



ナロジチ公園にある、廃村名を刻んだ石版

事故処理作業員の甲状腺癌

チェルノブイリ原発事故で子どもたちに甲状腺癌が増えていることはよく知られている。ところが事故処理作業員にも甲状腺癌が増えていることはあまり知られていない。以下に紹介するのは事故後ロシア医学アカデミー・放射線医学研究センターに登録され、1986年から1995年まで追跡調査された167862名のデータに基づく甲状腺癌発症率データの解析である（V. Kivanovら、British Journal of Radiology：1997年70巻937ページより）。

よく言われることだが、事故処理作業員は働き盛りの中年が多かった、という事実が図1ではっきりとわかる。しかし、30才以下の若い人も2.9%（30人に1人）はいたのである。これをロシア・ウクライナ・ベラルーシまで拡大解釈すれば総勢80万人のうち、23200人は30才以下の若者だったことになる。

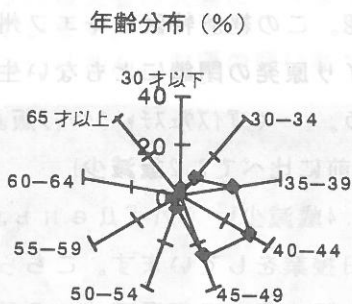


図1

図2はこれらの人々の被曝線量分布である。単位はmG（ミリ・グレイ：100mGが従来単位の10ラド）である。250 mG以上の強い被曝線量の人々は2.2%でむしろ少なく、99 mG（10ラド）以下の低線量被曝者が60.4%を占める。

このデータに登録された事故処理作業員の中から47名の甲状腺癌が発見された。癌患者の平均被曝線量は130 mG（13ラド）で被曝線量とは特に平行関係は無かった。ただし、43名が1986-87年の作業員で、1988-90年の作業員からは4名しか出ていない。このことは、同一線量でも短期間に集中して被曝した方が影響が大きいことを示唆している。患者のうち33名（67.3%）は35才から49才の間に発症している。データの分析の結果、放射線による甲状腺癌のリスクは、1G（グレイ=100ラド）あたり10000人に1.15人と推定され、これまでの研究結果（BEIR V報告）と良く一致することがわかった。（河田昌東）

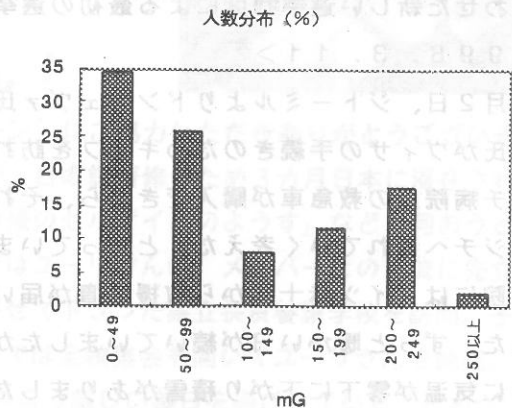


図2

表1 甲状腺癌の発症年齢

年齢 (才)	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	計
人数 (人)	1	3	12	12	7	3	6	3	47



〈一番左が高橋さん〉

《ウクライナとの文通の 翻訳の ボランティアは私自身の励み》

最近ウクライナから事務局宛に届いた、バレンチナさんという方のお手紙を翻訳しました。そこに書かれていたのは、子供たちがよく病気になるのに、給料が未払いのためにその治療をすることさえできないという深刻な内容でした。「…私たちは絶望し、意欲もなく、泣きたい気持ちにもなっています。いかにしてこの苦境から脱することができるのか、いったいいつか何かが変わってくれるのか、私たちにはわからないのです。でもも

ちろん、それぞれの人には自分の抱えている問題があり、どっちみち生きていかねばならないと言うことは、私にもわかっているのです。…」現在、不況とはいいながらもなお飽食の時代に生きている私たち日本人にとって、このような悲痛な叫びは想像を超えたものがあります。しかしこんな状況下でも、なお彼女は日本人達と文通を続けていきたいと希望しています。遠い国に友人を持つことはすばらしいことだと書かれていました。

今、チェルノブイリの被災者の皆さんとの文通がたくさん始まっています。手紙を通して伝わってくる事故の影響のすさまじさ、悲惨な生活の状況に、いまさらながらに原発事故の恐ろしさを知らされます。文通はお金や物品を直接送る支援とは違うけれど、手紙を通してウクライナと日本の間にたくさんの友情が芽生えて、被災者の皆さんの心の中にもほんのりと明かりがもたら、すばらしい事ではないでしょうか。(高橋 民枝)

事務局だより

今年度の皆様からのカンパ件数が、2月現在、1,083件になりました。経済環境がますます悪化する中で、これだけのご支援をいただいたことに深く感謝しています。チェルノブイリ救援・中部の活動を支える個人の力の大きさを、改めて感じています。

名古屋市の井上さんから「いつもポレーシェをありがとうございます。どんなふうに活動しているのかわかるのか、現地の人々がどんなに感謝しているのかわかるのか、よく伝わってきます」とのメッセージをいただきました。



『チェルノブイリからの手紙』(文通手紙集)の第一刷の300部は無くなり、第二刷分を事務局で作製中です。印刷から製本まで、事務局長がほとんど一人でやっています。この手作りの手紙集、多くの皆様に読んでいただけることを願っています。(松田)

お知らせ

●被災者からの手紙集・第2集

…好評につき、「増刷」の運びとなりました！
事故から10周年にあたり、救援・中部から出した手紙に対する56人からの返事です。被災地の生活や彼らの心境が伝わってきます。

手渡し 200円

実費送料とも 400円（振込）

●チェルノブイリの子ども達を書いた絵を

「葉書」にしました。5枚組・300円

●「チェルノブイリ救援・中部」の

シンボルマーク・シール 200円

目立つところに貼ってアピールしよう！

●放射能測定器

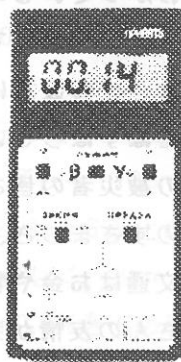
…手軽で精度の良いものをウクライナから輸入しました。

(a) プリピアチ 30,000円

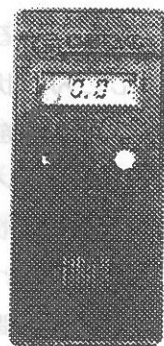
：チェルノブイリ原発の技術者達が使っています。

(b) シンテック 10,000円

：国際標準の被曝線量率が測れます。



(a)



(b)

※詳しくは事務局までお尋ね下さい。

編集後期

○初めて編集に参加させて頂きました。会報が出来上がったとき、どんな風になっているかととても楽しみです。頭に自信はありませんが、雑用ならお任せください！（AKIKO）

○豊橋では、リキデーター講演会のプレ・イベントとして3月29日に報告会を開きました。リキデーター支援のプロジェクトが成功し、彼らの手助けになりますように。（寛）

○2年前、キエフで宿泊予定に手違いが生じて路頭に迷った。その時、お宅にホームステイさせていただいた“地獄に仏のユーリさん”にやっと今回ご恩返しができた。（京）

○寒いと思っていたのに季節は巡り、活動開始のときになりました。新しいイベントは春の訪れとともに、彼の地にも暖かい心を届けてくれるのでしょうか？（美）

○締め切りまぎわの3月28日、キエフの竹内君から写真が届いた。ナロジチ病院に贈った救急車だ！眠い目をこすりながら原稿の差し替えを行なった。でも、うれしかった。（J）

印刷所：“ぼらんていあ”勢文社（名古屋市中川区）